

魚沼市生物多様性保全シンポジウムに参加して

石 沢 進

去る2009年12月6日に多様性保全のシンポジウムにパネラーとして参加したが、当日のプログラムが多彩であり、基調講演、活動報告などで講演時間が延びてパネルディスカッションの時間が短縮され、結果としてパネリスト一人当たり3分ほどの持ち時間となってしまった。参加者に「魚沼市の特に里山における植物の多様性」を強調しておきたいと思っていたが、短時間で紹介できなかつたので、当日話したいと考えていた概要を以下に掲載する。

魚沼市の里山における植物の多様性

新潟県の植物分布図集から見た場合、魚沼市の植物の中で、ザゼンソウが小出地区の比較的海抜の低いところに群生していることが記載しているが、特に保全のために注目すべき種が取り上げられていない。

その理由は、魚沼市の里山について植物を詳しく調べていない結果であると言える。県内における植物の分布調査の過程で、「ユキツバキの群生する地域の植物相は比較的単調である」という印象が強くなり、その結果、魚沼市の小出地区のようにユキツバキの群生するところに分布調査のために頻りに訪れることが少なかった。

しかしながら、魚沼市在住の富永弘氏は、自身の生活圏周辺の植物調査により、次々と「分布上珍しい植物」を発見され、注目に値する。ここではそれらの事例の幾つかについてを次に紹介する。

①新潟県内でも分布の少ない(稀な)植物の発見

マネキグサ：県内では佐渡島に報告がある以外知られていない。佐渡の現状は明らかでなく、これまでの調査で再確認されていない。小出には、そのような植物が生育している。

アイナエ：北蒲原郡笹神村(旧)、西蒲原郡寺泊町(旧)の分布情報があり、その他若干の記録があるが、県内稀産の種である。(本号の富永氏の報告のように珍しい存在である。)

ミチノクサイシン：県内に点在しているが、分布の少ない種であるが、魚沼市ではやや高い頻度で発見されている。

その他、オオフジシダ、フモトシダ、コバノイシカグマ、ホソバイヌワラビなど暖地系の羊歯植物の分布や常緑性フユイチゴやトウササクサなどの分布が注目される。

②県内で分布の偏りのある植物の発見

ラショウモンカズラ：県南部から群馬や福島の間境に分

布し、北では阿賀野川沿いに生育して弥彦山系見られるという分布上偏りのある種が生えている。

レンプクソウ：上記の種と分布が類似し、県南部と阿賀野川沿いに見られる本種も小出地区に分布している。

③小出地区内での分布の相違

魚野川を挟んで西側(左岸側)と東側(右岸側)で一方に偏って分布する植物が多く指摘されている。詳細については、富永氏が報告される予定である。

魚沼市の植物相は、種数も少なく分布上特色のある種も見られず、比較的単調な地域であるという私個人的な概念をくつがえして「多様な種が分布する」ことが明確になってきている。おそらく詳細な分布調査により、地域を特徴づける多くの植物「すなわち地域の宝」が発見されるであろう。今後の調査により、魚沼市全域の植物相とその分布域や分布上の特色、すなわち市内の財産目録を解明するであろう。それを基盤に今後の、保全と利活用について期待している。

魚沼市生物多様性保全シンポジウム

日時 2009年12月6日(日) 14:00～
会場 魚沼市地域振興センター
コンベンションホール

つなごう 魚沼のいのち



魚沼市自然史研究会 魚沼市自然史研究会 編集
新潟県立植物園 魚沼市教育委員会

【主催】
魚沼市
新潟県立植物園
魚沼市教育委員会

要するに魚沼市には、「多くの種が分布して多様性に富んだ地域である」と思われる。そのような実態が明らかになると、それに対する配慮が必要になる。そして、多様性の保全には地域住民の理解と協力が重要である。

魚沼市のオキナグサの保全活動のように住民の手で「保全の必要な種」への取り組みが重要である。豊かな自然環境(生物多様性)の保全には、住民の力を結集しない限り、不可能であろう。

生物多様性に関する情勢

本誌 第44号:48に「生物多様性に関する新潟県における取り組み?」について若干の情報を掲載した。その後、県が動き始めたとのことであるが、詳しい情報は明らかでない。自然再生の名目のために「トキの野生復帰」に多額の県費を配分しているとの話も耳にする。「日本古来の野生でないトキを殖やして何の意味があるの?」との疑問を抱いている多くの方々の話も聞いている。新潟県の自然はトキだけではないはずである。広く県内全域の自然環境にも視点を移して頂きたいものである。

新潟日報では、「里山の宝を再発見しよう」という社説を掲載しているので、以下に再収録させて頂いた。

里山の宝を再発見しよう

生物多様性

「これはミスオオバコと違って、以前は当たり前のように水田に生えていた雑草でしたが、今では絶滅危惧種になっています。觀賞用に高値で売られているんですよ」

柵田が広がる南魚沼市柵田地域で、毎月1回のペースで生き物観察会が開

「これはミスオオバコと違って、以前は当たり前のように水田に生えていた雑草でしたが、今では絶滅危惧種になっています。觀賞用に高値で売られているんですよ」

山の再発見につながっている。来月10月、国連の生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が日本で初めて名古屋市で開かれる。この中で、生物の多様性を脅かす要因の一つとして、荒れた里山に代表される「人間の活動の縮小による危機」が取り上げられる予定だ。

昔の暮らしに戻るのは無理だが、こうした里山の利用を復活させたい。そのためには新たな視点による取り組みが重要になってくる。

先月の観察会は、東京のNPO法人が地域に事務所を構えて行っている活動の一つだ。地元住民と一緒に地域の宝を掘り起こす一方で、都会の人々を呼んで、里山の魅力を発信している。地域内外の人たちとの連携は、里山と地域の再生を探る試みといえる。各地で

活動の輪が広がっているのは心強い。自治体の取り組みも重要だ。昨年施行された「生物多様性基本法」は、自治体が地域戦略を定めるよう求めている。既に兵庫、千葉、埼玉県などでは策定済みだ。コウノトリの野生復帰に取り組んでいる兵庫県は、里山林の再生や森林ボランティアの育成などに関する数値目標を盛り込んだ。

多様な生物をほくむには、総合的な対策を示す必要がある。農業や林業、公共事業の在り方も絡んでくる。本県も戦略の策定を急ぎたい。

県内の絶滅危惧種は10年前の調査で441種に上る。国内種のトキは絶滅した。中国産のトキを借りての野生復帰には、柵田の復元など地元住民らの並々ならぬ努力が注がれている。

14日には新潟市で、生物多様性とトキの放鳥をテーマにしたシンポジウムが開かれる。佐渡の取り組みも他地域での里山再生の参考になるだろう。まずは身近な自然を守る。ここに生物多様性条約の精神があるはずだ。